

2003年度 こころの相談室「ほっと・ルーム」活動報告

報告者 センター助手 角 田 真紀子

本年度のほっと・ルームは、カウンセラーが来校する月曜日と木曜日の週2日開室された。ほっと・ルームの室長は引き続き亀口（大学院教授）が担当した。カウンセラーは、昨年度までの長谷川（助手）と久保嶋（大学院生）から角田（助手）と瀬戸（大学院生）に交代した。長谷川先生（現・聖学院大学専任講師）には、引継ぎ困難なケースについて継続的に担当をお願いした。したがって今年度ほっと・ルームに関わったカウンセラーは4名で、週当たりの延べ人数は5名から7名であった。

今年度のほっと・ルームは、開室日に常駐しているスタッフが2人とも新任であったため、スタッフよりも生徒のほうがほっと・ルームや学校によく馴染んでいるということがあった。そのため、これまでも来室していた生徒たちがスタッフにいろいろ教えてくれることが多くみられた。また、前任者を懐かしんで「いつ来る?」「あの先生は○○だったなあ」という生徒もいた。概して、生徒の退行的な状況はあまりなく、比較的落ち着いた利用であった。

(1) オープンルーム

オープンルームの利用状況は表1のとおりであった。

ここ数年、開室時間の減少により、来室自体は減っている。カウンセラーが交代したことによる来室の減少が考えられるほか、以前よりも、中高生を問わず全体的に生徒が落ち着いてきたことが考えられる。生徒のほっ

と・ルーム利用は、例年と変わらず、高校生より中学生の利用が多い。その理由としては、①ほっと・ルームがぬいぐるみやゲームなど目に見える形での退行的要素を持ち合わせており、大人により近い高校生よりも中学生に魅力的であること、②中学生は思春期前期にあたり、大人との関係から仲間同士への関係へと移行する時期であるため、大人であるほっと・ルームカウンセラーとの関係を持つのに高校生ほどためらいがないこと、③ほっと・ルームが中学生棟側にあること、などが考えられる。

長谷川によると、オープンルームの特徴として、

1. 異学年交流によるピアサポート
2. 予防的機能
3. フォローアップとしての時間
4. 日常生活や学校生活でのちょっとしたズレを感じたときに訪れる場所
5. 居場所
6. 溜まり場・井戸端会議機能
7. リハビリテーションおよびハビリテーション機能がある（長谷川ほか、2002）。このなかでも今年度のオープンルームは、特に異学年の交流がさかんであった。大人がいる空間で、ある程度のブレーキがかかりながら、上級生が下級生を援助したりたしなめたりしていたように思われる。本稿の後半で、オープンルームで生じた異学年によるピアサポートについて紹介したい。

表1 中・高別オープンルーム利用状況（上段は男子、下段は女子）

	4	5	6	7・8	9	10	11	12	1	2	3	計
中	13	33	20	12	36	39	10	17	14	38	28	260
	12	21	10	6	26	40	44	19	15	12	12	217
高	28	17	2	4	4	5	27	45	14	5	0	151
	0	1	11	0	0	0	0	0	11	6	0	29

表2 中・高生別個別相談件数（上段は男子、下段は女子）

	4	5	6	7・8	9	10	11	12	1	2	3	計
中	1	1	2	2	3	0	0	0	0	0	0	9
	1	3	0	1	2	2	0	2	3	4	4	22
高	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	3

(2) 個別相談

個別相談は、カウンセラー4名が行った。中学生・高校生別の個別相談件数は表2のとおりである。

全体的に、オープンルームの利用にみられたのと同様に、中学生段階での個別相談利用が多い。相談内容としては、不登校や進路に関わる相談が多かった。高校段階での不登校は、進路変更や退学につながる可能性が高いため、高校生よりも中学生の利用が多かったと考えられる。また今年度は、スタッフ交代に伴い、重篤ケースの他機関へのリファーがあったため、全体としては昨年度より個別相談件数が減少した。

(3) それ以外の取り組み

今年度は、ほっと・ルーム開室5周年にあたること、また、普段ほっと・ルームを利用しない生徒や保護者にほっと・ルームを知ってもらうために、银杏祭にてほっと・ルームを開室するという試みを行った。ほっと・ルーム開室に先駆けて、スタッフは前日に校内を回り、银杏祭の準備をしている生徒たちに声をかけ、「ほっとするとき」をテーマに模造紙に自由に書き込みをしてもらった。東大附属と大学(学校臨床総合教育研究センター相談援助部門)が協働で展開している6年生の選択授業「総合心理入門」を受講している生徒にとっては、お題に対してイメージや思いついたものを書くというのは日常茶飯事のことであるため、「ほっとするとき」ということを聞いて、即座に書き出した。しかしながら、総合心理入門を受講していない生徒にとっては、このようなことは珍しいのか何を書いたらよいかかなり迷う生徒もいた。すでに書いてあるものと同じものが浮かんでしまうと、それではだめだと思ったのか、「違うのにしよう」と、一生懸命考えてくれたり、「これだと普通すぎる」、「これだと(学校では)まずいかな」、「ああそうそう、私もそう」などと仲間同士で会話をしたりしながら、生徒たちは真面目に取り組んでくれた。ところでなかなかほっと・ルーム以外のところでは会う機会が限られている私たちは認知度が低いようで、授業に出ている生徒に「(この人たちは)誰?」と聞いている生徒もいた。

また、银杏祭当日の開室日には、その模造紙をほっと・ルームの前に張り出して、自由に書き込みをしてもらった。银杏祭に訪れた幼児や親も書いていた。ほっとするときの代表的なものは、「お風呂に入っているとき」「熱いお茶を飲んだとき」「ふとんにはいったとき」など、日常生活で欠かせない基本的な事柄が多くあげられていた。「ひとりで落ち着ける空間」が、ほっとするときの典型なのかもしれない。

終わりにかけて 折り紙を通してのピアサポート —総合心理入門との協働—

先述したように、東大附属と大学が協働で展開している6年生の選択授業「総合心理入門」は、4月から12月までの開講である。総合心理入門では、フォローアップの時間として、1月以降も授業と同じ時間帯にきて話をしてもいいというアナウンスをしている。その時間帯は、授業の感想や改良点、心理検査、心理学的知識を含んだ雑学や生徒の個人的な悩みなど、授業の復習や授業では扱わなかった発展部分話しあっている。今年度は、受講生以外も含め女子生徒4名が何度か足を運んだ。そのうちの1回、印象的なエピソードをあげてみる。

それは、2回目に生徒が来た日のことである。「こんなにいろいろあったっけ」「ハートだ」と、ほっと・ルームは入ってすぐの折り紙コーナーに目を留めた。そんなことを言いながら席につくと、普段から授業に出ていない女子中学生Aさんが入ってきた。彼女は6年生をやや気にしながらお気に入りのぬいぐるみを抱えてソファに深々と座り込んだ。カウンセラーはAさんに挨拶をしつつ、6年生に「折ってみる?」と尋ねた。すると、「(折り紙)あるんですか?」と言って嬉々として早速折り始めた。彼女たちは、授業のグループ決めに使う折り紙を使っていろいろなものをよく折っていたので、このような状況は慣れっこである。でも、今回折ろうとしているハートの折り方は誰も知らない。スタッフもしらない。そこで、ハートをひとつ「解体」して、折り方を研究することになった。折り方は簡単なようでいて結構難しい。ああでもないこうでもないという試行錯誤を繰り返しているときに、Aさんはそれをぼおっと眺めていた。

「折り紙とかってやる?」とカウンセラーが尋ねると、すぐに6年生が「やろうやろう一緒に」と笑顔で手招きをして下級生を誘った。すると、A子がすんなり加わり6人での折り紙が始まった。上級生は折り紙を一人分足して「こうじゃない?」「あれ、違う」と言いながら、A子とともに進めていった。しかし途中で壁にぶちあたった。しばらく誰の紙も進まない。

ここで諦めることは簡単であるし、普通のことだ。わからない、仕方ない。ハートが折れないからあるいは折れたからといって、何かがあるわけでもない。でも、諦める生徒は誰もいなかった。しばらく考えながら、糸口を探していった。そして、一人の「発見」とともに、それを真似しながら全員のハートができあがった。「やった!」「かわいい」「うれしい」「もう1回作って覚えよう」としばらく折り続けた。これらのハート4つを組み合わせると、4つ葉のクローバーにみえた。みんなひとつは

ほっと・ルームに置いて、ひとつは持って帰っていった。

ほっと・ルームには、いろいろな気持ちを抱えた子どもが来る。気持ちの整理のつかない部分をいきなり表に出す生徒は多くはない。何となくもやもやする、何となくどうしていいかわからない、そんな気持ちがあるけれど、何を相談していいかもわからない。相談することなんてない、という子どもたちである。そのようなとき、カウンセラーは、たいてい何かの「第三者（それは、人でもモノでも話題でもかまわない）」を用意して、その人と関わることを試みる。このエピソードの場合は、折り紙という対象を通して、カウンセラーとのかかわりから仲間同士のコミュニケーションへつながった、そんな一場面であった。おそらく両者とも初対面であったろうし、6年生はなんとなくA子の雰囲気を感じて「この子は悩

みがありそうだ」と気づいたと思う。実際この頃、悩みの中で大きな岐路に立たされていたA子は、開室日には必ず顔を出して話をしていた生徒であった。その子がいったん悩みから離れ、他者とかかわり共通作業をすることで、少し余裕ができ、また現実の悩みに戻るということができたのではないかと思う。ほっと・ルームでは、日常生活の繁雑さに追われてともすると見落とされがちな、目に見えないところでの心理的なかかわりが日常的に行われている。

参考文献

亀口憲治・高橋均・長谷川恵美子・角田真紀子 2002 総合的心理教育の実践過程 東京大学大学院教育学研究科紀要 42 471-495